

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2025. 4. 12

文責／JUN

学び合う学級を始めるために

新年度が始まって1週間、皆さんの学級、学校、子どもたちの様子はいかがですか。

どんな様子であっても、そこから一年間を始めるわけなので、その状況をしっかり見極めなければなりません。どんな学級、どんな子どもたちにも合う方法などありません。その学級、その子どもたちの事実に対する思い、願いから「何をどうすべきか」を探り出し実行していくしかないのです。その第一歩を皆さんは踏み出したのです。

「始めよければ終わりよし」という言葉があります。それは、物事の始まりにおいてしっかり取り組めば、最終的によいものになるということです。これから一年間、子どもたち一人ひとりの学びをはぐくみ、人間的成長を図っていくには、私たち教師は、どの子どものこともしっかり見つめて、一人ひとりに対応していかなければなりません。それには、どれだけ一人ひとりのことを知っているかが問われます。

4月は出会いの月、教師は、自分の学級の子どもたちと出会い、子どもたちは、私の先生、私たちの先生と出会いました。その出会いから子どもと教師、子どもたち同士の「信頼関係」が築ければいいですね。その際大切なことは、お互いのことを「知ろう」という心持ちをだれもが持つことです。教師は、その心持ちを子どもたち以上に持っていなければなりません。

どんな授業をするか、どういう方法で行うか、どんなふうに「学び合う学級」をつくっていくか、そう考えると、すぐ「方式」「方法・やり方」を決めようとしてしまいます。自分の学級がどんな子どもの集まりなのか、一人ひとりの子どもはどういう子どもなのかも分かってもいいうちから、「方法」に走って陥るのは「子ども不在の授業」「子ども不在の学級」です。「学ぶのは子ども」なのにそうなったら子どもの学ぶ意欲は減退していくし、不安定な学級になっていくでしょう。

まず、子どもを知ることです。皆さんは、この1週間、どのようにして一人ひとりのことを見つめましたか。そして、どんなことが分かりましたか。子どもを知るには、どの子どもとも話すこと、子どもと一緒に遊ぶことが欠かせません。私は毎年子どもに日記を書いてもらい、日記帳で私と子どもの書き言葉によるやりとりをしていましたが、それがなかったら私の子ども理解は脆弱なものになったと思っています。子どもには、いつでも先生とつながることのできる場が必要なのです。きざかもしれませんが、教育の根底にあるのは一人ひとりの子どもに対する「愛」です。学級の子どもの十把一絡げにする見方をすることは決してあってはなりません。

子どもの状態がどうであっても、自分の学級の子どもたちは愛おしいものです。やんちゃする子どもがいても、どんな状態でも、この子たちにとって自分はかけがえのない「先生」だからです。なんとしてでもこの一年をよいものにしてやりたいですね。

そのために何をどう考えればよいか、そのことを知っていただくために作成した手引きのようなものがあります。以下、再録します。皆さんの教室が心通う学級になりますように。

1 安心して学べる学級は子どもとともに

- ① 安心して学べる学級をつくるのは教師です。けれども、どれだけ教師がそうしたいと思っても子どもにその意識がなければ、先生に言われたからそうしているだけになります。
- ② 安心して学べる学級には「学びの作法」が必要です。その作法は、子どもとともに考えて、子どもが自分たちで定めたものだと思えるようにするといいです。
- ③ ただし、それは子ども任せにすることではありません。どう考えてもそのようにしてはいけないということがあったら、それは、丁寧に、しかし毅然と、分かりやすく説いて聞かせなければなりません。子ども任せではなく、教師と子どもとの共同制作で策定するのです。
- ④ そう考えると、教師に二つの意識が必要になります。一つは、「子どもとともに」という意識です。そしてもう一つは、どう学ぶことが子どもをよりよく育てることになるのかという信念です。二つを合わせると「信念に基づく子どもへの寄り添い」とでも言えるでしょうか。
- ⑤ その信念の中心に「人は一人では生きてゆけない。学び合うこと、支え合うことでよりよい生き方ができる」ということを明確に位置付けることです。ペアやグループは必須の学び方ですが、この信念がないと、ただわいわいやっているだけになってしまいます。
- ⑥ ペアやグループは、教えてもらうのではなく、すべての子どもが、いや、子どもだけでなく大人でも、自分たちで学びを深めるための最も大切な、最もベーシックな学び方なのです。

2 学びは、わからなさや間違いから

- ⑦ わからないこと、間違えることは、恥ずかしいこと、劣っていることではありません。わからなさは学びの出発点、間違いは学びの森の入口です。
- ⑧ すぐにはできないこと、わからないことに取り組むのは値打ちのあることです。多くの場合、そういうところに学びの「つぼ」（大切なところ）があるからです。
- ⑨ 分からなさや間違いは学びのための「宝物」です。大切なのは、分からなくなったとき、間違えてしまったとき、あきらめず取り組むことです。
- ⑩ ねばり強く考えなければいけませんが、困ったときは友だちに尋ねていいのです。友だちに尋ねても考え抜こうという意欲が大切です。それが学び合いです。学び合いができる学級になれば、どんなわからなさや間違いも「宝物」にすることかできます。
- ⑪ 尋ねられたら、すぐやり方を説明したり、答えを教えたりしないで、「どういうわからなさ（間違い）だろう？」と相手の立場に立って考えなければなりません。
- ⑫ 相手のどこが分からないか、どう間違えたのかがわかってきたら、どこから考えていけば道が開けてくるかを見つけなければいけません。それには、常にいろいろと尋ねたりしながら、一緒になって考えていくことが大切です。そのように相手のわからなさに寄り添っているうちに、自分の学びも確かになっていくのです。

3 聴く力を育て、聴き合う学級にする

- ① よく聴く子どもはよく学ぶ子どもです。しっかり聴いたときは、聴いたことと自分の考えが頭の中で出会います。そのときに考えと考えのすり合わせをするのです。そうすると同じだなあとか、自分と違うぞとか思うようになります。そうなることがよい聴き方なのです。
- ② 聴いて気づいたことは話してくれた人に伝えるようにするといいです。そうしたら、またその人が話してくれるかもしれません。そういう言葉の行き来を「対話」と言い、それができるようになると学びが深まります。
- ③ 対話をするときは、自分とは異なる考えでも、その人の考えとしてしっかり聴くようにしなければなりません。そういう聴き方をすることで、だれもが安心して対話に加わることができます。
- ④ 対話をしているうちに、自分の考えを改めるのはよいことだし、これまで考えていたことが深くなったり新しいことに気づいたりするのは素晴らしいことです。もちろん自分の考えに確信がもてるようになるのも素晴らしいことです。
- ⑤ 考えを一つに決めるための対話もありますが、授業で行う対話は一人ひとりの学びを深めるために行うのが目的なので、無理に考えをまとめるのではなく、最後には一人ひとりが自分の考えをもつようにしたいものです。

【先生方へ】詳しくは、『続「対話的学び」をつくる』（ぎょうせい）をご参照ください。

それぞれの学年に応じて、子どもが理解できるように話してやったり、取り組めるようにしてやったりしてください。始めよければ終わりよしです。